愛媛県立医療技術短期大学看護学科卒業生の動向（第１報）

― 職業定着と職業継続意思 ―

矢　野　紀　子，徳　永　なみじ，野　村　美千江
山　口　利　子，塩　月　ぬい子，北　川　博　之

愛媛県立医療技術大学紀要 第4巻 第1号抜刷
2007年12月

愛媛県立医療技術大学紀要
第４巻　第１号　P.43-50　2007

資　料

愛媛県立医療技術短期大学看護学科卒業生の動向（第１報）
― 職業定着と職業継続意思 ―

矢　野　紀　子*，徳　永　なみじ*，野　村　美千江*
山　口　利　子*，塩　月　ぬい子*，北　川　博　之*

Attitudes of the Nursing Graduates of Ehime College of Health Science (1)
― Retention Rate and Intent to Continue Nursing ―

Noriko YANO, Namiji TOKUNAGA, Michie NOMURA
Toshiko YAMAGUCHI, Nuiko SHIOTSUKI, Hiroyuki KITAGAWA

序　　文

愛媛県立医療技術短期大学は昭和63年４月に，第一看護学科（３年課程）・第二看護学科（２年課程）・臨床検査学科の３つの学科を擁する短期大学として開学し，平成３年には専攻科（地域看護学専攻・助産学専攻）を開設した。看護学科では，豊かな人間性を養うとともに看護に関する専門的知識と技術を修得させ，創造的，科学的に看護を実践していく能力を備えた看護師を養成するという教育目的のもと，次の３つの教育目標があった。1. 総合保健医療の立場から，多面的に人間を理解できる能力を養う。2. 人間の健康状態の向上を目的とし，各対象の必要とする看護の援助ができる基礎的能力を養う。3. 地域社会における看護の必要性を認識し，保健医療チームの一員として，看護の役割を果たす能力を養う。看護学科では，これらの目的・目標を掲げ，３年課程と２年課程の２つのコースで教育が行われていたが，平成19年３月には平成18年度専攻科学生の修了により閉学することとなった。閉学までの19年間に2658名の看護師，保健師，助産師，臨床検査技師を輩出し，愛媛県内外の保健医療福祉の分野において職責を果たすことができる人材を育成してきたと自負している。

近年，看護系大学は全国で145校に増加し，看護教育も大学化，さらには大学院へとより高度化してきている。医療の高度化・複雑化に対応する看護職の養成機関である看護基礎教育に求められる役割は重要である。他大学においても，短期大学から大学へと移行し，専門職者としての自立やキャリアアップについて短期大学の果たした役割を明らかにするために卒業生の動向を調査し報告している[1~6]。愛媛県立医療技術短期大学も，平成５年には卒後教育の充実と短期大学教育発展への手がかりを求めて，卒業生・修了生の実態調査報告書を作成した[7]。平成15年は当短期大学の教育成果の評価を行うにあたり，卒業生を対象に，臨床看護実践能力が卒業後２年間でどのように変化するのかに関して，リーダーシップ，クリティカルケア，教育／協働，計画／評価，対人関係／コミュニケーション，専門能力開発の６カテゴリーについて，自己・他者の両側面からその実態を調査した結果[8]，自己評価・他者評価ともに経年で上昇しており，卒業生の専門職としての成長がうかがわれた。また，短期大学教育の役立ち感を聞いたところ，「臨地実習の経験」や「友人関係」「看護専門科目の学習」で役立ち感が高かった[9]。そして，平成16年度には愛媛県立医療技術大学を開学した。短期大学時代でのこれら長い歴史と伝統は愛媛県立医療技術大学へと引き継がれていくものと考える。

そこで短期大学時代の役割を終えて教育課程を閉じ四年制に移行するにあたり，看護学科卒業生の職業定着状況や職歴移動，職業意識の実態把握を行ったので報告する。

方　　法

１．研究対象：看護学科卒業生1561名
（内訳）３年課程747名，２年課程814名
２．調査期間：平成18年９月22日～10月31日
３．調査方法：郵送留め置き法による自記式質問紙調査
４．調査内容：
①　基本属性・年齢・学科・卒業年・出身地（県内・県外）
②　職業定着状況：現職の有無・勤務場所・離職理由・再就職意志
③　職務満足：業務・自律・環境・人間関係・給料への満足
①～③について独自に質問項目を作成した。職務満足については５段階（５点：大変満足している～１点：

*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

ほとんど満足していない）で評定を求めた。

5．**倫理的配慮**：プライバシーを保護するために無記名とする。また研究への参加は自由であること，調査内容は研究目的以外には使用しないこと，個人の特定はしないこと,調査用紙は研究終了と同時に破棄すること,アンケートの回答をもって同意とすること等，本研究の趣旨と目的を記入した用紙を同封し倫理的配慮につとめた。また研究者の所属組織の研究倫理委員会の承認を得た。

6．**関係者協力**：卒業生への配布は，愛媛県立医療技術短期大学同窓会である木蓮会の理事会で趣旨と目的を説明し，調査の協力を求めた。理事会での承認後，卒業生に配布した。同窓会に現住所の登録のない卒業生は大学事務局の協力によって，入学時の保護者の現住所に調査票の郵送を依頼した。

7．**用語の定義**：「医療系」とは看護師助産師保健師のいずれかの資格を活かして従事している職業分野全般のことを言う。また，産前産後・育児休暇中の場合も就労に含めた。

結　　果

1．対象者の概要

看護学科卒業生1561名のうち現住所に郵送できたのは1412名であった。回答数は488(回収率34.6%)，有効回答数は483であった。３年課程は254名(52.6%)，２年課程は229名(47.4%)であった。年齢別では20～24歳103名(21.3%)，25～29歳160名(33.1%)，30～34歳141名(29.2%)，35歳以上79名(16.4%)であった(表１)。そのうち，既婚者は229名(47.4%)，未婚者は252名(52.2%)，その他２名であった。愛媛県内出身者は373名(77.2%)，県外出身者は110名(22.8%)であった。

表１　対象の概要人数　　(　)内は%

	人 数	20－24歳	25－29歳	30－34歳	35歳以上
３年課程	254(52.6)	48	80	79	47
２年課程	229(47.4)	55	80	62	32
合 計	483	103(21.3)	160(33.1)	141(29.2)	79(16.4)

2．職業定着状況

現在，医療系に勤務している人は372名(77.0%)で勤務していない人は111名(23.0%)であった。年齢別に職業定着状況をみると，20～24歳86名(83.5%)，25～29歳131名(81.9%)，30～34歳93名(66.0%)，35歳以上62名(78.5%)であった(図１)。また，既婚・未婚別の職業定着状況は，既婚者は153名(66.8%)，未婚者は217名(86.1%)，その他２名であった(表２)。

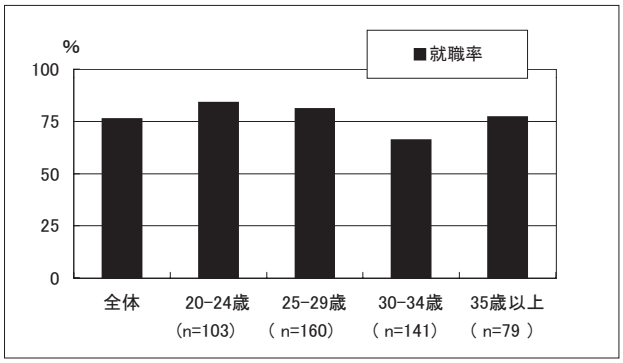

図１　就職率（年代別）

表２　婚姻による就職状況　　（人数）

	就 職 中	離 職 中	合　計
未　婚	217	35	252
既　婚	153	76	229
そ の 他	2	0	2
合　計	372	111	483

勤務形態は正規職員が334名，臨時・パート職員が34名であった。勤務体制は３交代制が206名(55.4%)，２交代制が47名(12.6%),日勤のみが103名(27.7%)であった(図２)。勤務体制別に子供のいる割合を見ると，３交代制が18.0%，２交代制が23.4%，日勤のみが50.5%，パート勤務が68.0%であった。

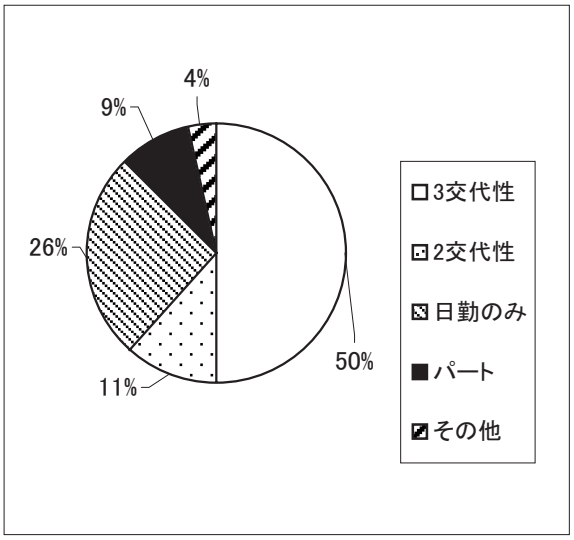

図２　勤務体制

学科別や出身地別で職業定着状況を比較したが，違いはみられなかった。

３．医療系分野での就労状況

現在，医療系に勤務している372名の勤務先は75.5％が病院で，他に，保健所・診療所・看護系教育機関などで働いていた(図３)。病院の規模は500-899床33.1％が最も多く，次いで100-299床27.4％，300-499床18.9％，900床以上9.6％であった(図４)。さらに，病院の規模による卒業生の就労形態を表３に示す。

勤務所在地は愛媛県内が243名(65.3％)，県外が126名(33.9％)，その他３名であった。現在，医療系で働いている愛媛県出身者290名が県内で働く割合は81.0％，県外出身者82名が愛媛県内で働く割合は9.8％であった(図５)。

１週間あたりの平均的な時間外労働時間は「なし」42名，「５時間以内」148名，「6-10時間」119名，「11-20時間」47名，「21時間以上」12名であった(表４)。また病床別にみた１週間あたりの平均的な時間外労働は「21時間以上」では300床未満の病院では１名,300-499床の病院では３名，500床以上の病院では５名であった(表５)。

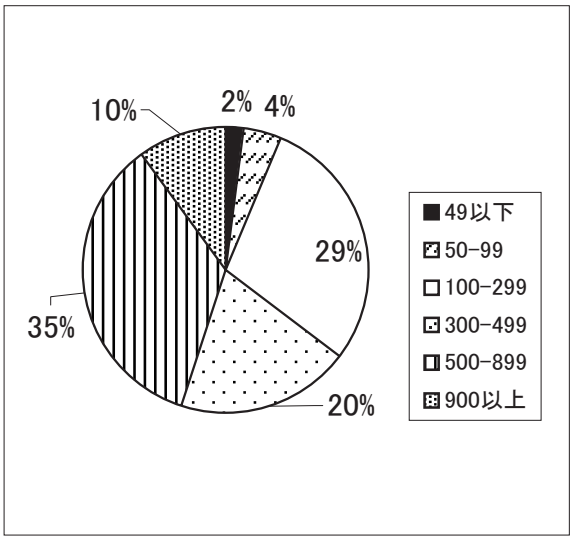

図４　勤務先の病院規模（病床数）

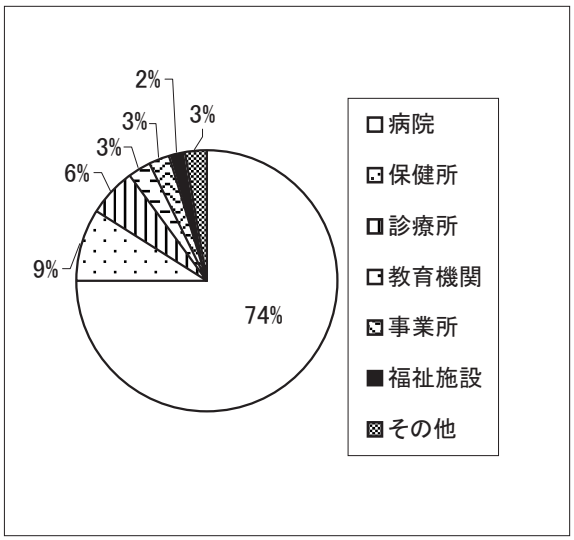

図３　現在の就職施設

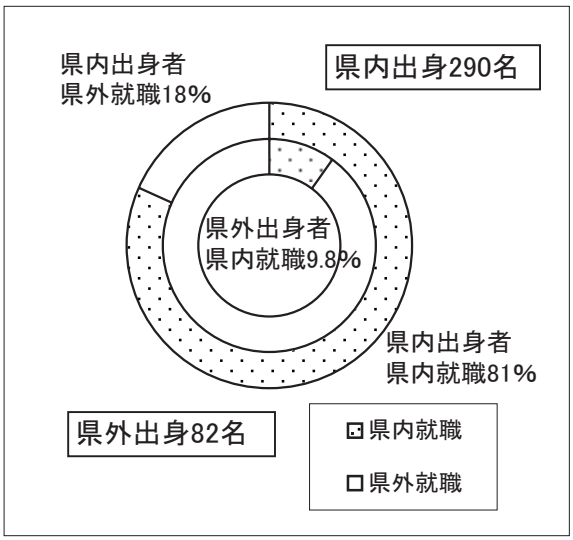

図５　愛媛県内外出身者の定着率

表３　病院の規模による卒業生の就労形態

（人数）

就労形態／病床数		49以下	50-99	100-299	300-499	500-899	900以上	合　計
正職員	三交代	2	7	52	40	73	18	184
	二交代	3	2	13	8	8	4	34
	日勤のみ			7	2	2	3	10
	その他		1	1		4		4
	小計	5	10	73	50	87	25	232
臨　時	三交代				1	2	1	4
	日勤のみ		2	3	2	1	1	9
	その他					2		2
	小計		2	3	3	5	2	15

（無回答を除く）

表４　１週間あたりの平均的な時間外労働

	合　計
なし	42
５時間以内	148
６～10時間	119
11～20時間	47
21時間以上	12
無回答	4
合　計	372

表５　病床別にみた1週間あたりの平均的な時間外労働

（人数）

時間/病床数	49以下	50-99	100-299	300-499	500-899	900以上	合　計
な　し		2	6	3	4	1	16
５時間以内	3	7	35	25	26	11	107
６～10時間	2	1	27	16	38	7	91
11～20時間		1	8	6	20	7	42
21時間以上		1		3	4	1	9
無　回　答			1		1		2
合　計	5	12	77	53	93	27	267

管理者(看護師長を含む)・中間管理職(副師長を含む)に就いている卒業生は32名であった。病院の規模による病院勤務者の職位を表６に示す。

４．現就労者の職務満足

職務満足では，「業務量」「給料」「福利厚生」「研修制度」で低い得点を示した。「同僚や上司・他職種との人間関係」「職位」「やりがい感」などでは高い得点を示した(図６)。図７に職務満足の内訳を示す。やや不満足・不満足が多かったのは「業務の量」「給料」「勤務時間」「休暇に関する制度」の順であった。「職位」では，『どちらでもない』が多かった。

５．現就労者の職歴移動と職業継続意思

現在，医療系で働いている372名のうち249名(66.9％)は，勤務先を変更することなく職業を継続していた(表７)。その理由は「地元だから」「公立だから」が多かった。さらに，「勤務年数が短い」「辞める理由がない」「自分の未熟さ」「他にいいところがない」「転職への不安・恐れ」があった(表８)。

表６　医療系勤務者の職位と病院の規模

（人数）

職位/病床数	49以下	50-99	100-299	300-499	500-899	900以上	その他
管　理　者（看護師長）			1	1			2
中間管理職（副 師 長）	3		6		7	3	9
ス　タ　ッ　フ	5	12	70	52	86	24	91
合　計	8	12	77	53	93	27	102

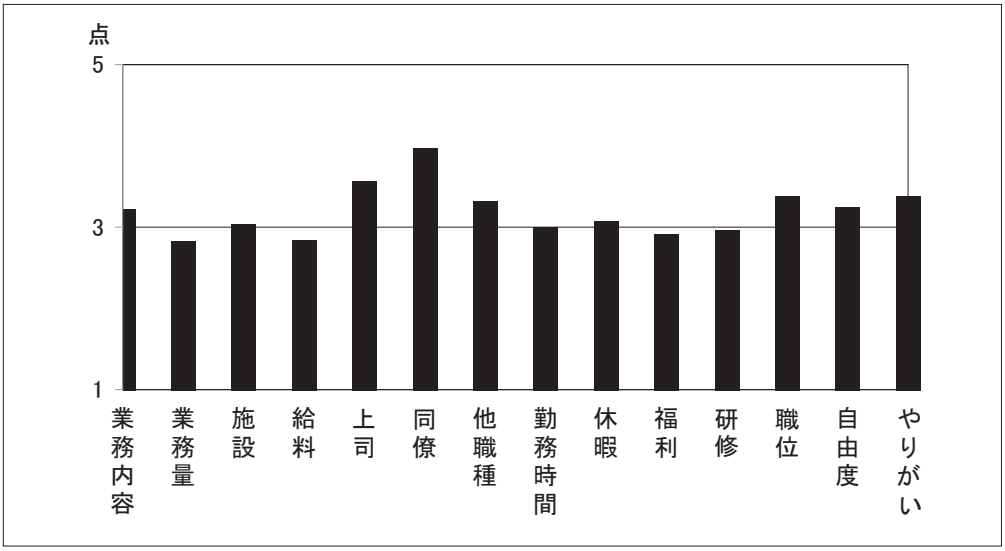

図６　職務満足平均値

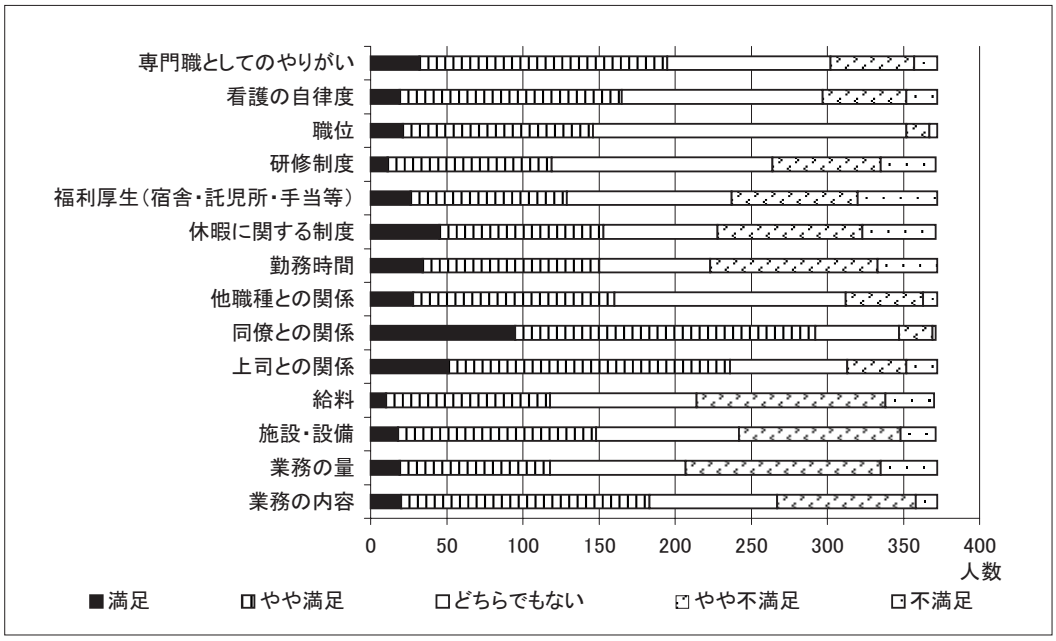

図７　職務満足内容

表７　年齢別にみた職歴移動

（人数）

勤務変更の有無/年齢	20－24歳	25－29歳	30－34歳	35歳以上	合　計
な　し	80	85	50	24	249
あ　り	6	35	42	37	120
（内訳）１回	4	25	19	16	64
２回		8	8	10	26
３回		1	8	7	16
４回			1	3	4
５回			1		1
不明	2	1	5	1	9

（無回答を除く）

卒業生483名のうち32.3％が転職を経験していた。転職回数の平均は1.6±0.9回で，初めての就職から転職までの期間は平均4.1±2.5年であった。また，転職の時期は，卒業生の73.3％が１～５年目以内に勤務変更をしていた。６～10年以内の勤務変更は26.7％であった。退職理由には「結婚」や「出産・育児・進学」「他にやりたいことがある」「適性に疑問」という理由があった。

現在，医療系で働いている人の今後の予定は「現在の勤務先での仕事を継続予定」63.6％であった。「離職や非医療系への転職を考えている」では約20％いた（図８）。

表８　今の職場で働き続ける理由

（人数）

	合　計
地元だから	68
公立だから	27
能　　力	20
給　　料	17
休　　暇	14
場　　所	11
看護の質	10
勤務年数が短い	10
辞める理由がない	10
職場環境の良さ	9
自分の未熟さ	7
他にいいところがない	5
転職への不安・恐れ	5
きっかけの無さや面倒な気持ち	4
職場からの引止め	4
前向きな志向	4
家　　族	2
生活のため	2
合　　計	229

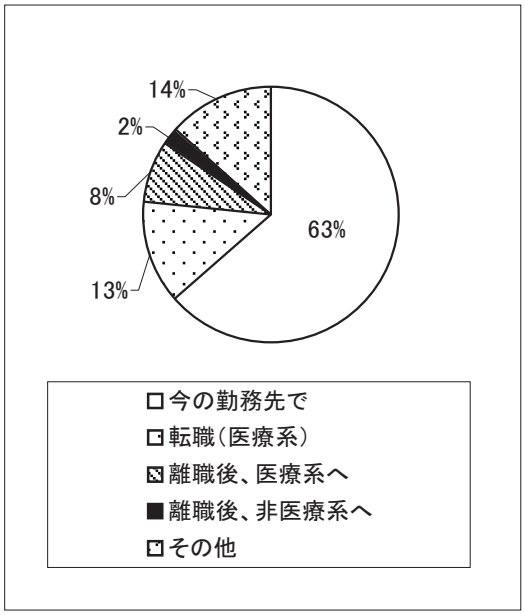

図８　現在，就職中の卒業生の今後の予定

6．職業選択に関する要因

1）卒業時の選択理由

卒業時，最初の就職先を決定する最大の理由(複数回答)は「地元であること」41.4%，「国公立である」11.2%，「看護の質」10.1%，「休暇がある」5.2%であった。また，「自分の意欲や方向性との合致」「キャリアアップの一段階」という意見もあった(表9)。

表9　卒業時就職先を選択した理由　（人数）

	合　計（%）
地元だから	200(41.4)
国公立である	54(11.2)
看護の質	49(10.1)
休暇制度	25(5.2)
住みたい場所	18(3.7)
自分の能力に合う	17(3.5)
家族の勧め	17(3.5)
給料	11(2.3)
病院の規模や労働条件の良さ	11(2.3)
マスコミ	5(1.0)
自分の意欲や方向性との合致	5(1.0)
キャリアアップの一段階	4(0.8)
実習での体験	3(0.6)
奨学金	3(0.6)
合格したから	2(0.4)
設備	2(0.4)
その他	2(0.4)
無回答	55(11.4)
合　　計	483

2）再就職時の選択理由

転職経験のある卒業生156名のうち現在就業中の120名が再就職の際に重視したことは「家族や知人の勧め」17.5%，「地元だから」15.0%，「看護の質」10.0%であった(表10)。また，「子育てや結婚生活が維持できること」，「自分の専門性や志向と合うか」「勤務体制などの条件が合うか」という意見があった。

表10　再就職時に職場選択した理由　（人数）

	合　計（%）
家族・知人の勧め	21(17.5)
地元だから	18(15.0)
看護の質	12(10.0)
休暇制度	9(7.5)
能力	9(7.5)
子育てや結婚生活が維持できること	9(7.5)
自分の専門性や志向と合うか	9(7.5)
勤務態勢などの条件が合うか	8(6.6)
給料	7(5.8)
場所	6(5.0)
公立だから	3(2.5)
マスコミ	2(1.7)
その他	2(1.7)

7．現在，離職中の卒業生の現状

現在，離職中の卒業生は111名(23.0%)であった。離職中の卒業生の子供の末子年齢は1歳未満12.6%，1－2歳は17.1%，3－5歳は13.5%，6歳以上は0.9%であった(表11)。

現在，離職中の47.7%は「医療系への再就職」を考えていた。また，再就職の意思のない卒業生は26.1%いた(図9)。

表11　現在離職中の子供の末子年齢　（人数）

	合　計（%）
1歳未満	14(12.6)
1－2歳	19(17.1)
3－5歳	15(13.5)
6歳以上	1(1.0)
不　明	62(55.9)
合　　計	111

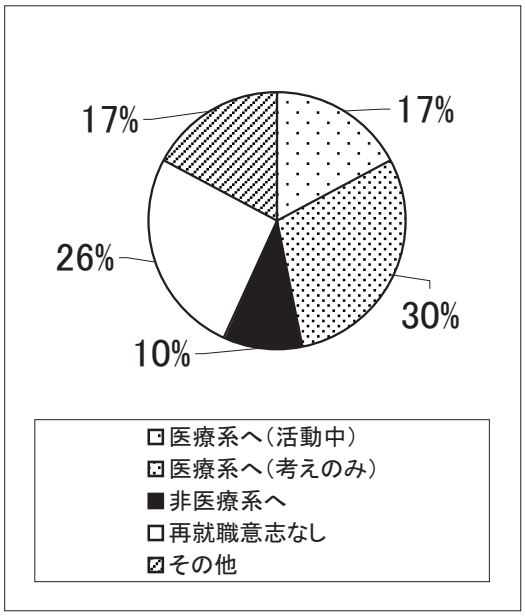

図9　現在，離職中の卒業生の今後の予定

考　　察

1．職業定着状況

今回調査した卒業生の77.0%が看護師・保健師・助産師のいずれかの資格を生かして医療系分野で働いていた。年齢別にみると30代前半で就労率が一旦低下しているが，30代後半で上昇し，8割近くが就労している。結婚後も66.8%の卒業生は医療職に従事していた。卒業生は看護師といった職業柄女性が多い。性役割を考えると20歳代から30歳代は結婚・妊娠・出産・育児というライフイベントの時期である。西浦ら[1]の神戸市看護大学短

期大学部の卒業生を対象とした研究でも30～34歳の就業している割合が低くなっており，同様の結果が得られたと言える。

また，初めての就職から転職する期間は4.1年だった。日本看護協会が行った2005年看護職員実態調査[10]では，離職までの平均就業期間は33.1ヶ月であった。主な離職理由には「進学・出産・結婚・勤務時間がながい」ことがあり，今回の調査と同様のことが言える。卒業生は，この調査結果より就業期間は長くなっているが，20歳後半から30歳前半に一旦医療職を退職し，また子育てが落ち着いた30歳後半頃に再就職をするといったことが考えられる。勤務体制別にみた子供のいる割合では日勤・パート勤務が多かったことから，子育て中の看護職は日勤・パートを選択していると言える。卒業生は，結婚・出産後も働き続けるといった，専門職としてキャリアアップを重ねている現状があった。

２．医療系分野での職業継続意思と職務満足

現在，医療系で働いている卒業生の約70％が，勤務先を変更することなく職業を継続していた。その理由は「辞める理由がない」「ほかにいいところがない」であった。否定的な意見が多くある一方で，「勤務年数が短い」「自分の未熟さ」など，看護師として成長過程にあるなかで，看護師としての自立を目指した意見もみられる。再就職先も医療系を選択したいと考えている人が多かった。藤原ら[2]の研究でも転職を含めた継続就労希望者は８割いた。卒業生も資格を生かした職業を継続したいと考えていることがわかる。

市江ら[5]が卒業生の職場の満足度を調査した結果でも，人的環境よりも労働環境という点で満足度が低い傾向であった。当短期大学卒業生も，看護職としてのやりがいや看護の自律度は高かったことから，専門職として，自律性を保ちながら職業を継続していることが考えられる。しかし，病院に勤務するスタッフ職のうち70.6％は３交代制または２交代制で働いている。病床数が増加するほど，時間外勤務が多い傾向が見られた。2005年看護職員実態調査[9]でも，医療の高度化や在院日数短縮により看護業務の密度が高まる中で，依然厳しい労働環境におかれている実態が明らかになっていたように，看護職として労働環境に不満足感をもっていることがわかる。

また，28名の中間管理職を合わせると，管理職経験者が32名いた。職位に対する満足の平均値は高く，不満足は少なかったが，「どちらでもない」が多くみられる。当短期大学が初めての卒業生を送り出してから，約17年経過している。経験を重ねた卒業生が増加して，今後もさらに活躍していくなかで，管理職経験者が増加していくことが考えられる。

３．職業を選択する理由

卒業時，就職先を選択する理由に，半数には届かないが，41％と地元志向が強くみられた。現在の勤務先所在地も，65.3％が愛媛県内であった。現在，医療系で働いている67.7％の卒業生は，勤務先を変えないで仕事を継続していたことから考えると，地元志向が強いと言える県民性はあるが，特に，愛媛県内の保健医療福祉の分野において職責を果たすことができる人材を育成してきたと言える。これは設置主体が県である短期大学にとって地域貢献の役割を果たしていることがわかる。また，勤務先を変えないで継続していくことは，職場を数ヶ月で転職するより，経験を重ねることができ，看護職として自立することにもつながっていくと考えられる。学生時代の進路指導時に，その人にあった職場選びが重要であると言える。

再就職の際に重視したことは，「家族や知人の勧め」「地元だから」「看護の質」であった。また，「子育てや結婚生活が維持できること」，「自分の専門性や志向と合うか」「勤務体制などの条件が合うか」という意見もあった。卒業時は，看護の質や，住みたい場所等を優先していたが，再就職の際は，家族との生活を尊重しながらではあるが，そのなかでも看護職を継続していくための条件を探しながら，キャリアを生かしていると考えられる。

現在，離職中の卒業生のうち，６歳未満の子供のいる割合は43.2％であった。離職中の卒業生の約50.0％は「医療系への再就職」を考えていたことからも職業継続していく意思がある卒業生は多いと言える。

今後は，職業継続または再就職の意思がある卒業生に必要な支援に関する調査のほか，ライフイベントをきっかけとした長期離職の回避，キャリアを活かしたワーク・ライフ・バランスの実現に向けて，愛媛県立医療技術大学が果たすべき役割を検討する必要があると考える。

引　用　文　献

１）西浦郁絵，中野智津子，能川ケイ他(2005)：神戸市看護大学短期大学部卒業生の動向(Ⅱ)―第１報卒業生の現状―，神戸市看護大学短期大学部紀要，24，91-99.

２）藤原智恵子，中野千津子，熊川ケイ他(2005)：神戸市看護大学短期大学部卒業生の動向(Ⅱ)―第２報看護職としての成長―，神戸市看護大学短期大学部紀要，24，101-118.

３）遠藤恵子，佐藤幸子，青木実枝他(2004)：山形県保健医療短期大学看護学科卒業生の動向(第１報)―卒業生の実態と看護技術演習に対する評価―，山形県立保健医療研究，7，49-56.

４）橋爪永子，臼井徳子，二村良子(2002)：三重県立看

護短期大学卒業生の職業意識についての研究，三重県立看護大学紀要，6，95-101.
5）市江和子，園井葉子，羽場俊秀他(2001)：日本赤十字愛知短期大学の卒業生の実態調査(その１)―就業状況・職業意識を中心に―，日本赤十字愛知短期大学紀要，12，83-92.
6）市江和子，園井葉子，羽場俊秀他(2001)：日本赤十字愛知短期大学の卒業生の実態調査(その２)―進学・退職理由を中心に―，日本赤十字愛知短期大学紀要，12，93-106.
7）愛媛県立医療技術短期大学学生委員会(1993)：卒業生・修了生の実態調査報告書-卒後教育の充実と大学教育発展の手がかりを求めて-.
8）徳永なみじ，中野静子，黒田優子他(2003)：卒業生の臨床看護実践能力―卒業後２年間の変化―，愛媛県立医療技術短期大学紀要，16，39-47.
9）中平洋子，塩月ぬい子，川本和子他(2003)：看護学科卒業生の職場における実態，愛媛県立医療技術短期大学紀要，16，75-79.
10）社団法人日本看護協会(07/9/12)：社団法人日本看護協会ニュースリリース「2005年看護職員実態調査」，http://www.nurse.or.jp/home/opinion/newsrelease/2006pdf/20060705.pdf

要　　旨

本研究は愛媛県立医療技術短期大学看護学科卒業生の動向を調査することによって，職業定着状況や職業継続意思を明らかにすることを目的に行った。研究方法は郵送による自記式質問紙法で行い，回収率は34.6%であった。現在，医療系に勤務している人は77.0%で，勤務していない人は23.0%であった。医療系で働いている66.9%は勤務先を変更することなく職業を継続していた。今後，現在の勤務先で仕事を継続予定の人は63.6%であった。また，卒業生の32.3%が転職を経験していた。平均転職回数は1.6±0.9 回であった。現在，離職中の47.7%は医療系への再就職を考えていた。卒業時，就職先を決定する理由は「地元であること」「国公立である」「看護の質」「休暇がある」であった。転職経験のある卒業生が再就職の際に重視したことは「家族や知人の勧め」「地元だから」「看護の質」であった。

謝　　辞

アンケートに答えてくださった卒業生の皆様に深く感謝するとともに，アンケート発送にご尽力いただいた木蓮会の理事会の皆様に深謝いたします。なお，本研究は，愛媛県立医療技術大学平成18年度教育研究費の助成を受けた。